

大原美術館と「白樺」の人たち（五）

——美術館二十周年記念行事のこと——

唐 井 清 六

The Ohara Museum of Art and the Members of the *Shirakaba*

——A Consideration of the Events Commemorating

the 20th Anniversary of It's Foundation——

Seiroku KARAI

VII

一枚のゴッホ、一枚のセザンヌを日本にもたらそうとして、「白樺」の作家たちがほとんど四年ごしに懸命の運動を展開しているとき、彼等とは無関係のところではやはり西洋美術を日本に招来しようとする別の動きがあった。それは実業家たちによる美術品の購入である。松方幸次郎、大原孫三郎のばあいがそれを代表するものであろう。

川崎造船所の初代社長である松方幸次郎は、大正三年七月第一次世界大戦が勃発するや、鉄を買いあさって注文のないままに七、八千トンの大型船をつぎつぎと建造する。戦争による船の不足を見越してのことである。彼の

予想は見事に的中する。彼のコレクションは、このストックボートを売りこむためにロンドンに滞在していた大正五年に始まる。もともと美術品を愛好するところなどなかったらしい彼だが、日本に西洋美術の本物が皆無に近い状態であることを知るに及んで、いわば一種の愛国心に火を付けられた恰好で、猛然と買い集めてゆく。彼は、若き日アメリカのラトガーズ大学、エール大学に学んだ国際人であった。翌々七年までに至るこのときの滞在で彼が求めたのは、運送にかかわった山中商会の岡田友次の残したメモによると、絵画八六七点、彫刻、タペストリー、家具調度品四八〇点、ほかに浮世絵八二一三点があった『火輪の海』下、一九九〇・七、神戸新聞社。

この蒐集に当っては彼はこの地で知り合ったイギリスの画家フランク・ブラングインの意見を参考にしたい。ニュースは日本に伝わり、「白樺」(大正七年三月号)の「六号雑誌」で武者小路は次のように書く。

《或る新聞に松方幸次郎と云ふ人が二百万円で美術品を買ったことが出てゐた。二百万あればセザンヌやゴッホは優に百枚は買へる。レンブラントだつて五六枚は買へる。何を買ったかと思ふと、ブラングインや、シモンださうだ。本当なら少々腹が立つ。誰も松方幸次郎をたよつてもゐないが。少々ひどすぎる。》

松方が求めたおびただしい数の西洋美術品は、二九便の船に分載されて大正八年の春には日本に届き始める(前同)。逐次、作品の内見会が開かれ、それに参加した長与は「白樺」(大正九年五月号)の「六号雑誌」に感想を述べる。

《此間松方幸次郎氏の買つて来た絵を見た。油画ばかり四五十枚あつた。それがずらりと室々に並べてあるので少し面喰つた。其処にあつた有名な画家の名を挙げればピントルツチオ、マンテナ、チチアン、ヴン・ダイク、ヴン・デル・ゴーエン、ゴヤ、テオドル・ルソー、コロオ、ミレエ、クルベエ、モンティチェリ、(五六枚)ゲンスポロー、コンスタブル、カザン、ジョンキンド、レルミット、ピサロ等であつた。その中で自分に確かに本物だと思はれたのはミレエ(板ペラ)コロー(風景八号位)ルソー(全十二号位)ピサロ(全五十号位?)モンティチェリ、その他本物であらうと贋せものであらうと大した相違のないもので、マンテナヤ、チチアン、ゴヤは自分には今の処確信を以

て明言出来ない。……今其処にある全部の画でも全体の四十分の一位だと云ふから全体の絵がすっかり揃つて一堂へ懸けられたらとに角美事だと思ふ。ドラクロアも一枚買った相だ。セザンヌも買った相だ。(数は分らないが二三枚より多くはないらしい。)ロダンは四十駄買った相だ。もう沢山荷は着いたが、荷をあけても置く場所がないので神戸の川崎造船所の倉庫に収つてあるさうだ。三年位後には麻布仙台坂に美術館が出来るとの事、とに角全体の中大部分が詰らないもので、十分の三四が贗せであつたとしても日本にとつて喜ばしい事だと思ふ。》

松方の蒐集はこの後も続き、大正十年から翌年にかけてと同十五年から翌昭和二年にかけてとつごう三度おこなわれている。この松方のいわば第一回目の蒐集作品の一部が公衆に披露されるのは大正十一年、東京日々新聞社主催でおこなわれた「泰西名画展」においてであつた。また、同十二年には大阪でも毎日新聞社主催で「松方幸次郎氏所蔵泰西名画展覧会」が開催されている。

いっぽう大原孫三郎の蒐集が始まるのは松方よりすこし遅れて大正九年である。大原は彼とほぼ同年齡で同郷人である児島虎次郎の画家としての資質と人物とを見込んで、明治四十一年フランスに留学させる。このときの児島のフランスからベルギーにかけての滞在は五年に及ぶが、その帰国の際に大原の許しを得て求めたのがアマン・ジャンの「髪」である。いまま大原美術館に展示されているこの作品は、大原コレクションの第一号である。大原は大正九年にも画業に行き詰まっている児島をみて、フランス行きをすすめる。そのさい児島は洋行出来ない多くの画学生のために、西洋美術の本物を購入してほしいと大原に訴える。進言は受けいれられ、ここに大原の蒐集が本格的に始まるのである。児島の二度目の洋行は一年にもみたくない短いものだったが、当時健在だったモネやマルケやマティスらを直接訪ねて絵画二十数点を購入する。松方の派手で大雑把な買い方と比べるとつましいものだが、その地道な蒐集はその後息長く続けられることになる。このとき求めた作品は翌十年三月、倉敷の女子尋常高等小学校で「第一回現代フランス名画家作品展覧会」として公開されるのである。

のちに「白樺」の作家たちと深い関係をもつ大原のこうした動向は、「白樺」誌上には現われていない。

とにかく大正十年前後はさまざまなかたちで西洋美術がわが国に流入してくるのである。

大正九年十月号の「白樺」は、岸田劉生の作品十二点を挿絵に使い、劉生のエッセー「美術（裝飾論）」を載せ、ちよつとした劉生特集号の趣きであるが、劉生はさらに「六号にて」で次のように書く。

《美術院で谷中に催した西洋近代の大家の作を見たがどれにもあまり引かれなかつた。いくらセザンヌのものでも、あゝいふ、簡単なエスキースでは人に迫る力はない。》

《ルノアルは甘いものだと思つた。画に芯がない。近代人にでもロートレックには芯がある。しかし、ルノアルには芯らしい芯がない。中心へ行くと、綿をつかまされた様な気がする。美らしい美がない。》

《兎に角、谷中の展覧会を見て感じた事は、日本の美術界に権威のないといふ事であつた。しつかり、己れの立場に立つて、ものを見る人がゐない。西洋の近代のものなら何でも偉大だと頭からきめ込んでかゝつてゐる。……ロダンの諸作にも自分はこの頃はつきりと芸術的不服がある、ロダンといふ人は尊敬す可き人だと思ふが、作家としての自分はロダンの作に頭は下らない。》

西洋の芸術家一辺倒の風潮に対して、劉生は実作者の立場から一石を投じている。これは大正九年九月、第七回院展の会期中に「仏国近代絵画及彫塑」として陳列されたものをさすようで、ルノアルやロートレックなどの絵画、ロダンの「考える人」などの彫刻が展示された模様である。

武者小路は翌月の「白樺」（大正九年十一月号）で、劉生の考えを尊重しながら、いかにも武者小路らしい反論を試みている。

ところで白樺美術館のその後の動きである。大正九年十月号の「白樺」の美術館報告は第二期寄附金第二回報告として《第二期の報告と改めます。何故ならば第一期中に集った金を送ってしまった後で、新しくこれから集つてゆくわですから。》のコメントをつけている。会員数小計六、累計十九。口数小計九、累計百二十七である。このときの送金その他の内訳は大正十年一月号の「白樺」の「六号雜記」で詳しくされている。

《○次に白樺美術館の会計の報告をしますと、巴里の相馬君に送った金は仏貨で三八九六フラン五五サンチムになります、之が第一寄附金の総額です。それで

セザンヌの風景 四万フラン

デューラーのエッチング 千五百フラン

を買ったのですから、差引金二五三三フラン四五サンチム不足したことになります。それから14のシャヴァンヌのデッサンは相馬君から寄附してくれたものです。》

この最後のところにある14の数字は、この文章のすぐ前にある《来たもの来るものを表》にしたものの通し番号である。

文界、画界、学界を巻きこんで全国規模で展開された白樺美術館設立へむけての運動（第一期）の成果は、セザンヌの未完成の「風景」（油彩）、デューラーの「正義」（エッチング）、相馬の寄附になるシャヴァンヌのデッサンの三点の獲得に終わった。このシャヴァンヌのデッサンは女の裸体だということで「白樺」では紹介出来なかったらしい。

まずゴッホ、セザンヌを合言葉に出発したこの運動であるが、ゴッホに手がだせないでいる武者小路には新しき村にもっとも多額の寄附をしてくれている神戸の実業家山本願弥太のことが浮かんだらしい。武者小路は大正九年三月号の「白樺」に載った候補作品9点のうちの6のゴッホ「向日葵」（高さ97cm、幅70cm、八万法）を山本にすすめる



白樺美術館への寄附金から購入出来たのは結局この二点におわった。
上はセザンヌの「風景」。現在は大原美術館に寄託、展示されている。



同じく寄附金から購入したデューラーの「正義」(エッチング)。現在
は日本民芸館蔵。いずれも大正10年2月「白樺」挿絵から。

のである。山本は快諾。この山本もそれまで美術にはあまり関心がなく、敬愛してやまない武者小路を喜ばせたいがための購入であった。この同じ号の「六号雑記」に《それに僕の友人が今度、ホッホの向日葵、挿絵にいづれ出るものと思ふが、珍しいのだが大したものだ、を買ふことになった。もう金も送った》（無車）とあるから、白樺美術館が買った作品よりもだいたいぶはやく手をうっているわけである。ところがこの「向日葵」がなかなか届かないで「白樺」の人たちは不安と焦慮をつのらせることになる。

山本願弥太と武者小路との出会いは大正四年、武者小路の著書をとおしてなされた。この年刊行された「彼が三十の時」を、自分もたまたま三十歳であったことから読み、強い感銘を受ける。願弥太は武者小路より一つ下の明治十九年大阪の生まれであった。大正二年、兄が経営する綿糸、綿布業の山本博一商店に入り、その大阪支店を創立、同八年には株式会社山本商店を創設する。願弥太はその後も「或る青年の夢」（大正六年）、「幸福者」（同八年）と武者小路の著作を読みふける。大正九年、武者小路は講演に神戸を訪れたさい、山本願弥太の家を訪ねている。願弥太は願堂の号で若いときから俳句に親しんでおり、昭和十八年に出した句集『向日葵』にはそのときの句が入れられている。

武者小路氏の来訪

《與へられし十月二十三日かな

秋天の澄みて泉に響くもの

火の如き喜びに燃え曼珠沙華

其夜神戸演説会に氏の熱弁を聴く群衆溢るゝ計り

動かせぬ力におされ夜寒人》

また、その年の暮には願弥太が開村してようやく二年をすぎた新しき村を訪ねている。

《日向の新らしき村を訪うて 十句

.....

十二月三十日夜着村武者小路氏の家に宿る二句

外套に松火をかゝげ迎へられ
布団きて安らかにある心かな

.....

村の生活二句

満ち足りて泪ぐみつゝ冬の日に
畑冬菜見てゐて心清められ

三日間先生と起居を共にし

教へらるゝことの多くて冬麗ら

財界動搖に疲労せる心神は痛く慰められければ

木枯の野を過ぎてこゝ長閑なり》

といったぐあいである。

顧弥太が買った「向日葵」は、五月二十一日ピンチ丸に乗せて直接郵船会社に送ったというが、七月になっても八月になっても届かない。「白樺」の「六号雑誌」は毎号そのことにふれている。

《○ホツホの油エなどは来るか、来るかと待つてゐるが、まだ僕の処には通知がない。九月末に展覧会をやるならば僕も見にゆけると思つてゐる。暑中休暇は展覧会をするにはふむきだからその時分になるかと思つてゐる。さうなれば僕はうれしい。そして帰りに方々へよつて展覧会をしたり、対話会をしたりしたくも思つてゐる。七月十八日 武者小路実篤》（「白樺」大正九年八月号）

《○ホッホの画がまだ来ないので少し心配してゐる。横浜にはとゞいてゐるはずと思ふ。それより一ヶ月程あとで出したデュラーのエッチングと、シャバンヌのデッサン四枚はとゞきましたが、云ふまでもなく美しいものです。

無車》（「白樺」大正九年十月号）

無車はこのデュラーのエッチングなどについて翌十一月号の「六号雑誌」で次のように書いている。

《○デュラーのエングレーピング「正義」も来た。獅子を押へつけて左の手にはかりをもつて右の手に刀剣を持つてゐる画だ。版が実に鮮明で、デュラーの不思議な強さと、美しさが出てゐる。白樺美術館の宝の一つである。「正義」が来たのもうれしい。シャバンヌのデッサン一枚は白樺美術館のものだ、女の裸体で美しいものだ。巴里の相馬君が寄附してくれたのだ。深く感謝してゐる。》

しかし、「向日葵」はなかなか届かない。大正九年十二月号「白樺」の「六号雑誌」には無車として次のようにある。

《○自分達に心配なことがある。ホッホの「向日葵」がもう四月程前にとゞいてゐるはずなのが、まだ我等の手に入らないことだ。それと一緒に随分いゝセザンヌの水彩の「水浴せる男」とロダンのデッサンが一枚来てゐるはずだがまだ我々の手に入らないことだ。一日も早く我々の手に入つて安心したいものと思つてゐる。之は白樺のものではないが、なくなつたら大へんだと思つてゐる。ホッホの油絵は日本には今の処それが一枚だけで、それもホッホとしてもいゝ方だからなほ氣になる。しかしなくなりはいとと思つてゐる。こんなことをかいてゐる内にも見つかつてゐるかと思つてゐる。》

「向日葵」はその年（大正九年）も押し詰まつた十二月に入つてようやく到着する。岸田劉生はそのときのことを「劉生日記」（大正九年十二月十二日（日））に次のように書きとめている。

《帰つたら上京中の山本願弥太君から電報でゴッホの画が無車の本宅にあるから見に来てくれとの事、中島と二人



武者小路の依頼によって神戸の実業家山本願弥太が買ったゴッホの「向日葵」。昭和20年8月5日から6日未明にかけての芦屋空襲で焼失した。



同じく山本が白樺美術館のために購入したセザンヌの「浴する男達」。現在は石橋財団ブリヂストン美術館蔵。いずれも大正10年2月「白樺」挿絵から。

で急に上京。藤沢で雨が降り出す。一時四十九分の汽車にのり、雨にふられて四時前に武者の家につく。ゴッホの向日葵号程のもの、外にセザンヌの小さいペンに水彩したエスキース、外にロダンの素描もあつた。ゴッホは恐ろしいとは思はないが尊敬はする。へんに内から生きてゐる。やはり造りものといふ氣はしない。生きて居る。及ばぬ人とは思はぬが友として尊敬する。セザンヌは小品だがいいものではある。ロダンはつまらない。小泉も来る。》

大正十年一月号「白樺」の「編輯室にて 同人」に小泉は十二月十五日の日付で歡喜の言葉を書きしるす。

《○然しゴッホは到頭来ました。大変なものです。ゴッホのものの中でも代表的のものといへるものだと思います。それは生々しく燃えてゐるとともに深い、何ともいへない美しさを感じずにはおらぬれません。》

○それと一緒にセザンヌのデッサンも来ました。それにもずる分感心しました。変に深い味がします。何ともいへない芸術の貴さにうたれます。三人の浴みしてゐる男の画で、皆が油絵で割によく知つてゐるものと殆ど同じものだと思ひます。

○其他セザンヌの自画像（細川君の買ったもの）と景色（白樺美術館で買ったもの）とミレーのデッサン（山本君の買ったもの）とが横浜に来てゐる筈なので、近日中には確に手に入ると思はれます。》

千家元磨も「向日葵」を見にかけつけた者の一人である。武者小路に宛てた大正九年十二月二十一日付の葉書である。

《昨日元園町の御家へ行つてホッホを見せて頂きました、実に驚嘆しました。想像以上の素晴らしいものです、実に嬉しくてたまりません、讚美の仕様がありません 君より先きへ見て済まなく思ひます、君達が見る日を想像して喜びに胸がをどります、本当に大したものです、流石ホッホです、実に感謝のしようがありません》

志賀直哉も我孫子から上京して元園町の武者小路の本宅を訪ね、絵を見ている。大正十年一月一日付の武者小路に宛てた年賀状の余白に次のように書く。

《大変御不沙汰してゐる 昨日ホツホとセザンヌ見て来た、セザンヌは小さいものだが複雑な深い美しさがある、ホツホの方は大きなものだ 想像したよりも落ちついたものに思つた 矢張り随分立派なものだ 昨日雪の降つてゐる時だつたので色も多少落ちついた感じがしたのかも知れない、母君と御話した。》

志賀直哉らしい、落ちついた、いい文章である。ここに出てくるセザンヌの「小さいもの」とは「劉生日記」に《セザンヌの小さいペンに水彩したエスキース》と書かれるもので、のちに「浴する男達」と題されるものである。

ここでさきにもちよつとふれた《来たものの来るものを表に》したもの（「白樺」大正十年一月号の「編輯室にて同人」、執筆は小泉）を見ておきたい。

《1ゴオホ 向日葵 油絵

2セザンヌ 水浴 素描彩色

3同 デッサン 単彩

4ロダン デッサン 単彩

5同 デッサン

6ミレー デッサン

7ドラクロア デッサン

8シャヴァンヌ デッサン 単彩

9同 冬の習作 単彩

10同 デッサン 単彩

以上山本君の分

11セザンヌ 自画像 油絵



武者小路の依頼で学習院での同級生で貴族院議員の細川護立が買ったセザンヌの「帽子をかぶった自画像」。現在石橋財団ブリヂストン美術館蔵。「美術館の夢」カタログ（平成14年、兵庫県立美術館）から。

以上細川君の分

12 セザンヌ 風景 油絵

13 デューラー 正義 エッチング

14 シヤヴァンヌ デッサン 単彩

以上白樺美術館の分

○ 右の中6、11、12の三品は横浜にある見込、5、7の二品は未着の分。』

翌月の「白樺」（大正十年二月号）は美術館記念号として巻頭に「向日葵」をカラーで、巻末に七点（うち「風景」はカラーで）を挿絵として掲載する。

これらの作品のうち「向日葵」となるぶ目玉は細川護立が購入したセザンヌの「自画像」であろう。のちに「帽子をかぶった自画像」と題されるこの作品は「白樺」には挿絵としては用いられな
いでおわっているが、大正九年九月号「白樺」の「編輯室にて」に小泉が《○最近に武者からの手紙に巴里の相馬君
から白樺の為にセザンヌの風景の大変いゝのを一枚（四万フラン）細川の為にセザンヌの自画像」を一枚を買つ
たといふ通知が来たといつて知らして来ました。》と書くものである。セザンヌはこの文章にある「風景」と山本願
弥太の買う「水浴」の二点があるわけであるが、「風景」は油彩ながら未完成作品であり、「水浴」はデッサンに水彩
をほどこしたものであり、これだけではヨワイと判断したのか武者小路はさらに細川護立にすすめてこの「自画像」

を買わすのである。細川は武者小路よりは二歳年上であるが、病弱で学習院で二度落第して同級生となる。世が世なれば十六代目の熊本藩主であり、このとき貴族院議員であった。細川は父祖伝来の膨大な美術工芸品、古文書類などを所持しており、彼自身も別にコレクションをはじめていた。この頃、「白樺」の友人たちとの交流から、西洋美術にも関心を示すようになっていた。細川は武者小路の申し入れを、山本のときと同じように二つ返事で承諾するのである。「時事新報」(大正九年十二月一日)は、『細川侯爵の買い求めたセザンヌの自画像、時価六・七万フラン』と報じており、これはゴッホの「向日葵」よりは少し安い価格である。

展示作品が揃ったところで白樺の人たちはいよいよ白樺美術館第一回展覧会の準備に入る。展示する作品は

- ・セザンヌ、自画像(油絵)。風景(油絵)。浴する男達(水彩)。素描一枚。
- ・デュラー、正義(エッチング)。
- ・ドラクロア、素描一枚。
- ・シャヴンヌ、素描五枚。
- ・ロダン、素描二枚。
- ・ゴッホ、向日葵(油絵)

の総計十四枚。

会場は京橋停留場そばの星製薬会社の四階。ここには前年五月にオープンしたばかりのギャラリーがあった。会期は三月五日から十三日までの二週間。

白樺美術館会員の入場はもちろん無料だが、会員以外の人からは有料としてその収益金をつぎの作品購入の資金にあてるとというのが白樺の人たちの考えであったが、もともとこの会場が無料で提供されたものであり、それはいわば社是に反するというわけで結局全員無料ということにして、有志の人に臨時会員証を交付することになったらしい。

星製薬や星薬科大学を創始した星一^{はじめ}は無類の社会奉仕家として知られる人であった。

しかし会場は大へんな盛況で、このときの純益金六百円は白樺美術館第二期寄附金第八回報告に記録されている。こうして公開されたセザンヌやゴッホの油絵は、むろんわが国においては初めてのものであった。白樺の人たちはさきのロダン紹介につづきふたたびそうした榮譽をになうことになるのである。

大正十年四月号の「中央美術」には「漫画セザンヌ展観」（目次のタイトル）として近藤浩一路が絵と文章を載せている。会場の空気的一端をうかがうことが出来る。



《複製のセザンヌ崇拜家がその正身正銘^(ママ)の真物自画像を眼前に見て、夢かとはかり驚嘆狂喜を超越してしまったのか、但しは目が眩んでしまふのか、画の側へ行つて目をこすりつけて御手際拝見は恐れ多いといふ次第か、みんな二間も遠く離れた椅子に実に神妙に黙々と、只管に祈るが如く考へ込んでゐた。又後から後から行つたものもさうしなくつちや画家としての面目を失するかのやうに、みんなく同じ空気に吸ひ込まれて同じ型にはまつて考へ込んでしまった。（星製薬楼上に於ける白樺社のセザンヌ原画展観所見）》

大正十年三月号の「公共白樺美術館員募集」の記事には、それまで繰り返されてきた《今美術館の持つて居るものは、ロダンのロダン夫人の胸像、或る小さき影、巴里のゴロッキ。（以上彫刻白樺寄附）》、ジョンのデッサン。ラムのデッサン。（以上リーチ寄附）》に《セザンヌの風景、デューラーのエッチング「正義」、シャヴンヌの素描。》が誇らしげに付け加えられている。

この「シャヴンヌの素描」であるが、前にもふれたように女の裸体ということでは結局どこへも発表出来ないままに今日に至っているようである。武者小路実篤記念館に問い合わせたところ、現在その所在も不明とのこと。大正十年六月号の「中央美術」に中川一政が書いている詩は、まさにこの作品をうたったものであらう。

《シャバンヌの素描》

——白樺社へ将来されたる——

あゝ偉大なる哉

シャバンヌ

一人の裸体をかきて

永遠の相を籠すがたむるもの

これシャバンヌの芸術なり

日本は多幸なるかな

シャバンヌの芸術来れり

われは喜びたのしむ

一人ひそかに

あゝシャバンヌをわれは見たり

健全にして偉大にして壮重なる

その心境をわれは見たり

日本は多幸なるかな

ひそかにわれも幸せなるかな

わが心を悠々とし

「たのしからずや」と我に云はしむるものは。」

（本稿を成すにあたり、雄松堂出版の川島澄子氏、武者小路実篤記念館の福島さとみ氏、日本近代文学館の渡辺展亨氏のお世話になりました。ここに誌して厚くお礼申し上げます。）